和洋女子大学紀要　第六十三集　一三―二四（二〇二三・〇三）

【審査論文】

『枯尾華』「十月を」歌仙分析

An analysis of *Kareobana*

佐藤勝明

SATO Katsuaki

要旨

元禄期の連句作品を分析する作業の一環として、其角編『枯尾華』（元禄七年刊）に収められる、嵐雪系俳人による芭蕉追悼の「十月を」歌仙を対象とする。そして、その分析により、芭蕉流の手法（とくに前句と離した付け方）が共有されていることは認められるものの、各付合では見込の甘さが目につき、思いついた語や想念に頼って一句を仕立てがちであることを指摘する。

キーワード：　俳諧・元禄期・連句・嵐雪・枯尾華

注釈のない元禄期の連句作品を対象に、各付合を分析して傾向を探る試みの第三弾として、本稿では、其角編『枯尾華』（元禄七年刊）の「十月を」歌仙を取り上げる。同書は元禄七年十月十二日に没した芭蕉の追善集であり、上巻巻頭に其角「芭蕉翁終焉記」と其角発句・支考脇の四十二吟百韻（十月十八日興行）を配するほか、蕉門諸家による追善の連句や発句をいち早く収めたことで知られる。下巻巻頭には嵐雪による追悼文が置かれ、それに続くのが、嵐雪系の俳人十九人による「十月を」歌仙（十月二十二日興行）である。本誌前号で無倫編『紙文夾』（元禄十年秋序）の「嬉しさを」歌仙を分析したところ、基本的には芭蕉流付合手法の共有が確認できる一方、芭蕉のめざした俳諧と異なる傾向も随所に見いだす結果となった。その数年前、芭蕉の「かるみ」には同調しなかったとされる嵐雪らがどのような俳体を示しているかが、本歌仙に対する主たる関心事となる。各付合の分析では、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか〔見込〕、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか〔趣向〕、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか〔句作〕、という三段階による分析方法を用いる。底本には天理図書館綿屋文庫俳書集

成22『芭蕉追善集』（八木書店　平成9年刊）所収の影印を用い、『宝井其角全集』（勉誠社　平成6年刊）等の翻刻本文を参照した。句の掲出では、原典に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名（カナは原典にある通り）を私に付した。

十月廿二日夜興行

十月を夢かとばかりさくら花　　嵐雪

発句　冬十月「十月…さくら花（帰花）」　植物木　花の句

〔句意〕この十月を夢かと思う私の前で、桜が夢かとばかりに帰花を見せる。

〔備考〕前書により、芭蕉の遷化から十日後の興行と知られ、句中の「十月」も師の没した時期を示すことに疑いはない。よって、「十月を夢かと」は、師を失ったこの十月が現実のことと受け止めきれず、夢のように感じていることを意味し、同時に、これは「さくら花」にも掛かって、夢かと見まがうような桜の開花を意味することになる。季の詞としては「十月」があるものの、一句の季題には「帰花」を挙げるべきで、『初学抄』『毛吹草』等に十月のものとして扱われる。初冬の小春日和に、草木が時節はずれの花を咲かせることで、ここは釈迦の入滅に沙羅双樹が枯れて鶴のように白くなったという「鶴林」の伝説を踏まえ、これを開花に反転させた可能性がある。

しぐれの中に一筋の香　　氷花

脇　冬十月「しぐれ」　降物

〔句意〕時雨が降り過ぎる中に、香を焚く一筋の煙が見えている。

〔付合〕①前句が芭蕉の死去による呆然とした状態を詠んだものと受けとめ、②十月は時雨の季節であることや芭蕉の時雨吟などに思いを致しつつ、その葬儀の様子などを想像して、③時雨が通り過ぎる中、墓前には一筋の香を焚く煙が上っているとした。

〔備考〕「しぐれ（時雨）」は初冬のにわか雨で、周知の通り、芭蕉にはいくつもの著名な時雨吟がある。作者の念頭にもそのことがあったと見て間違いなく、この語を用いることがそのまま追悼に通じていたのであろう。「香」は薫物（たきもの）として用いる香料のことで、衣類に焚きしめたり、茶席を清めるのに使うほか、仏前にくゆらすものでもあった。もちろん、ここでは芭蕉の葬儀が行なわれた義仲寺（滋賀県大津市馬場にある単立の寺院）を思いやり、その墓前に思いを馳せたものに相違ない。

鎰（かぎ）の手の二間（ふたま）は五畳〳〵にて　　百里

第三　雑　居所

〔句意〕鉤（かぎ）の手のように配置された二つの部屋は、ともに五畳であって。

〔付合〕①前句の香を茶の席の清浄さのために焚いているものと見換え、②その茶室の様子を描こうと考え、少し変わった間取りのものを想起して、③鉤手形（かぎのてなり）の二間は五畳ずつであるとした。

〔備考〕「鎰の手」は「鉤の手」に同じく、鉤（先端の曲がった金属製の細長い器具）のようにほぼ直角に折れ曲がっていること。「二間」はここでは二つの部屋があることで、「五畳〳〵」はそのそれぞれが五畳であることをいう。茶の湯の座敷は四畳半を基本としつつも、二畳・三畳・四畳・六畳など種々のものがあり、六畳の広さに一畳分の床を取り込む五畳敷などもあった。ここもそのような間取りであると見ておきたい。

立居（たちゐ）は見ゆる沖の船頭　　神叔

初オ4　雑　水辺・人倫

〔句意〕沖の船頭が立ったり座ったりするのもよく見える。

〔付合〕①前句は廊下を直角に曲がったところの二間の意であると解し、宿屋などのさまと見込んで、②海岸に沿って建てられた家の見晴らしのよい部屋を想定し、③沖の船頭の立居までよく見えるとした。

〔備考〕「立居」は立つこととすわることで、日常の簡単な動作をもいう。

有明のはつかに白き山の裾（すそ）　東潮

初オ5　秋八月ないし三秋（有明）　月の句　天象・山類

〔句意〕有明月は残りながら、山裾はわずかに白くなっている。

〔付合〕①前句から遠くまで眺めやっている様子を見て取り、②月の座であることも考慮に入れつつ、その人が海から反対側に目を転じたら何が見えるかと案じて、③有明月の下、わずかに白んできた山の麓であるとした。

〔備考〕「有明」は陰暦の十六夜以後、月が空に残りながら夜の明けることで、その月をもいう。「はつか」は「僅か」で、数量などが少ないこと。「山の裾」は山麓。作者の念頭には、『枕草子』一段の「やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて」があろう。

真鶸（まひわ）さそひて豆まはし鳴（なく）　嵐雪

初オ6　秋八月（真鶸・豆まはし）　動物鳥

〔句意〕マヒワを誘うようにマメマワシが鳴いている。

〔付合〕①前句を清少納言の記述そのままの景と見て、②同じく『枕草子』の記述を用いながら、その山中の生類のさまを取り上げようと考え、③ヒワを誘って豆回しの異名をもつイカルが鳴いているとした。

〔備考〕「真鶸」はスズメ目アトリ科の小鳥で、ただヒワということも多い。亜寒帯地域から冬鳥として渡来するほか、北海道でも生息し、「鶸」は『毛吹草』『山之井』等に八月の扱い。体色は緑黄色で美しく、籠鳥として飼育もされる。「豆まはし（豆回し）」はアトリ科の鳥である斑鳩（いかる）の別名（豆を口に含んで回しながら割る習性がある）で、やはり『毛吹草』『山之井』等に八月の扱い。一句は、ある鳥が鳴くと別の鳥もまた鳴き出す場面をとらえ、それを「さそひて」と表したわけである。『枕草子』四一段の「鳥は」に「ひわ」も「斑鳩の雄鳥」も取り上げられており、前句に出典を揃えたものとおぼしい。また、『類船集』に「菽（マメ）→名月」の付合関係（「豆名月」の語による）があり、その連想もあるのであろう。

蜀黍（たうきび）の実をばそがれて畑中（はたけなか）　卜宅

初ウ1　秋八月（蜀黍の実）　植物草

〔句意〕トウモロコシの実をそぎ取られた殻が、畑の中に捨てられている。

〔付合〕①前句が秋の小鳥を扱ったことに着目し、②小鳥が好む穀類の実りを想像して、その一景を探り、③実をそがれたトウキビが畑中にあるとした。

〔備考〕「蜀黍」は「玉蜀黍」に同じく、イネ科の一年草であるトウモロコシ（こはトウキビと発音）で、『滑稽雑談』等に八月の扱い。「そがれて」は削り取られることで、トウモロコシの実は歯でそぎ取るようにして食べるのが一般的。前句の小鳥から穀物が連想されたのは間違いないところながら、小鳥が数枚の皮に覆われた実をそぐとは考えにくい。といって、人が加熱した実を畑で食べるのもやや不自然（家で食べた殻を捨てた可能性はある）で、ここは収穫者が家畜の飼料用に実をそぎ取ったと見ておく。

木舞（こまひ）あらはに手で土をぬる　舟竹

初ウ2　雑　居所

〔句意〕壁の下地があらわになった箇所に、手で土を塗っておく。

〔付合〕①前句を収穫者たちがトウモロコシを食べたものと見定め、②自給

自足でようやく暮らしを立てる農家を想定し、何でも自分たちでやってのけるのだろうと考え、③壁の木舞が露出すれば自ら手で土を塗るとした。

〔備考〕「木舞」は「小舞」とも書き、壁の下地として縦横に組んだ竹や細木をいい、「木舞あらはに」は壁土がはがれて下地が露出したことをさす。壁土を塗る際は、職人が鏝を使った三度の塗り（下塗り・中塗り・上塗り）を重ねるのが一般的なので、この句の「手で土をぬる」は、一部にはがれが生じた箇所を自分で修繕する場合と見られる。

新川（しんかは）にまだ名もつかぬ橋の上　桐雨

初ウ3　雑　水辺

〔句意〕新川に架けられた、まだ名前も付いていない橋の上である。

〔付合〕①前句を新しい工事の一過程と見換え、②連衆の身近な話題として架橋の件を思い起こし、③新川でまだ名もない新橋の上のことであるとした。

〔備考〕「新川」は全国に見られる川の名であり、一般名詞の可能性もあることながら、連衆の土地勘からして、霊巌嶋（現在の東京都中央区新川）を南北に分けて開削した堀江（新川とも新堀川ともいう）をさすと見られる。万治三年（一六六〇）ころの開削を担当したのは河村瑞賢ともされ、昭和二十三年に埋め立てられるまで、新川には三つの橋（一之橋・二之橋・三之橋）のあったことも知られている。

雨のふる見て照（てれ）〳〵といふ　月下

初ウ4　雑　降物

〔句意〕雨が降るのを見て、「どうか照ってくれ、照ってくれ」と懇願する。

〔付合〕①前句から新橋の完成間近であると看取し、②工事の完了を願う人々の思いを想像し、③雨が降るのを見れば「照れ、照れ」と口にするとした。

〔備考〕「照〳〵」は、晴れることを願っての言ゆえ、テレテレと命令形で読んでおく。雨が降れば工事が中断するため、こうした言を吐くわけである。

存在（ぞんざい）に物をおしゆる田植（たうゑ）ども　風洗

初ウ5　夏五月（田植）　人倫

〔句意〕聞かれたことを教える態度も粗雑な、田植えの者たちである。

〔付合〕①前句から雨の多い時節であることを見込み、晴れを祈る人がいることに着目し、②田植えが五月雨の時期に行なわれることを想起し、晴れ間に作業を終えようと急いでいるさまを思い描き、③気がせくまま、ぞんざいに物を教える田植えの人たちであるとした。

〔備考〕底本で「存在」に音読みを指示する右傍線があり、ここはゾンザイと読んで、粗雑でいいかげんな物事のやり方をさす。「田植ども」は田植えをする者たちの意で、「田植」「早苗」「早乙女」などは諸書に五月の扱い。

膳にばらりと明（あく）る干蝦（ほしえび）　楸下

初ウ6　雑

〔句意〕お膳の上に干した海老をばらばらとあける。

〔付合〕①前句に「存在」の語があることに着目し、②そうした人物のやりそうなことを探り、③乾燥した海老を膳にばらりとあけているとした。

〔備考〕「膳」は料理を載せて供する台。「ばらり」は何かが落ちるさまを表す語で、まとまっていたものがばらばらになって落ちることをいう場合が多い。「明る」は「空る」とも書き、ここは他動詞で、中に入っているものを出して空にすること。「干蝦」は干して乾燥させた海老で、『寛政武鑑』（『古事類苑』による）の記述から「献上」の品でもあったことが知られ、貴重な食品と考えられる。それを無造作に扱う（器から膳にそのまま落とし入れる

のであろう）ところに、この人物の「存在」な性格がかいま見られる。

約束の茶の湯延(のび)してさびしがり　　咸宇

初ウ7　雑

〔句意〕約束していた茶の湯の会が延引となり、さびしさを隠せずにいる。

〔付合〕①前句の動作から一人暮らしの人物を見込み、「蝦」からも老いのイメージを感じ取り、②隠居した人が楽しみにしそうなことは何かと考えつつ、それが期待はずれになった場合を想像し、③約束のできていた茶会が延期になってさびしがるとした。

〔備考〕ここでの「延して」はノビシテと発音し、期日や時刻が予定よりも先になることを意味する。「さびしがり」はさびしいという感情を隠さずに示すこと。後の落語「茶の湯」がそうであるように、茶の湯には隠居した人の手すさびという一面があり、そうした一種の常識が句の核をなしていよう。また、「蝦」の縁起のよさや曲がった姿から、長寿で腰の折れがちな老人を導いてきた可能性（吉井美弥子氏の教示）も十分にある。

赤い菊より黄(き)な菊を嗅(かぐ)　　牧人

初ウ8　秋九月（菊）　植物草

〔句意〕赤い菊よりも黄色い菊を選んでその香をかいでみる。

〔付合〕①前句から仲間内の茶会を楽しみにする趣味人の姿を見定め、②そうした人が同じく熱中するものとして、園芸を話題に取り上げようと考え、③赤色よりも黄色の菊を好んで香をかぐとした。

〔備考〕「菊」は諸書に九月の扱い。菊の栽培は江戸時代に入って広まり、品種の改良も進んで、『後の花』（正徳三年刊）には現在も見られる花形のほぼすべてが掲載されているという。嵐雪の代表作「百菊を揃(そろえ)けるに／黄菊白菊其外(そのほか)の名はなくも哉」（『其袋』）も、そうした園芸熱を背景に詠まれたと見て誤らず、作者牧人の念頭にもこの句があったと考えられる。

上気(じやうき)して吹(ふか)れに出(いづ)る秋の風　　当歌

初ウ9　秋七月ないし三秋（秋の風）

〔句意〕頭が上気してしまい、秋の風に吹かれようと外に出る。

〔付合〕①前句を菊の品評会や鑑賞会における一齣と見て、②愛情を込めて育成した鉢の出品者が興奮しているさまを想像し、③のぼせをさましに会場の外に出て秋風に吹かれるとした。

〔備考〕「上気して」は頭に血が上ってのぼせた状態になること。元禄ころには園芸に関する関心が階層を越えて共有され、植物関連の書物がいくつも刊行されたり、愛好者の会が催されたりもした。ここでも、そうした催しにおける高揚感が想定されていると見られよう。『古今集』の秋冒頭に置かれた藤原敏行「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」以来、「秋風」は立秋を知らせるものとして受けとめられ、『せわ焼草』等に七月のものとされるも、基本的には三秋にわたる語といってよく、『をだまき綱目』の「秋風」には「秋の風」も併出される。

客とならべて床(とこ)をとる月　　銀鉤

初ウ10　秋八月ないし三秋（月）　月の句　人倫・天象・夜分

〔句意〕月下、客人と床を並べて寝る用意をする。

〔付合〕①前句を酒を飲んだための上気と見換え、②時節柄にそれを観月の会のこととして、宴も果てての後もその余韻にひたろうとする人のさまを想像し、③客と並べて寝床をしたくする月夜であるとした。

〔備考〕「床をとる」は蒲団を敷いて寝床の用意をすること。月見の宴の興

奮も醒めやらぬまま、床を並べて話を続け、その余韻を味わおうというのであろう。前句をはさんで菊見と月見が向き合う格好であり、観音開きの難が指摘されてもしかたがないであろう。

ちる花も翁について廻るらん　　東潮

初ウ11　春三月（ちる花）　花の句　植物木・人倫

〔句意〕散る花もこの翁を慕い、ついて廻ることであろう。

〔付合〕①前句から寝床で主客が話を交わす様子を見て取り、②客を話のうまい人と考え、その作り話の内容をあれこれ案じて、③落花も翁について回るだろうとの、その人の言で一句とした。

〔備考〕「翁」は男の老人をさす語で、老人に対して親しみを込めて使う場合も、老人が自分をへりくだっていう場合もある。「花」との関わりでは、老人が枯木に花を咲かせた昔話の「花咲爺」がただちに想起されるところで、この話は近世初期には成立していたとされる。「ついて廻る」は離れずに付き従うこと。客がおとぎ話を応用した作り話で主人を楽しませる場面を想定し、花を咲かせた爺の私であるから、散る花も私についてくるに違いないとしたのであろう。なお、蕉門で「翁」といえば芭蕉をさすのが常識で、表面上の意味とは別に、この句にも芭蕉翁への敬愛の念が込められていよう。

山吹もらふ顔ぞわすれね　　嵐雪妻

初ウ12　春三月（山吹）　植物草

〔句意〕山吹を渡してもらう、その顔が忘れられない。

〔付合〕①前句が説話的な内容であることに着目し、②同じく説話的な内容を取り上げようとして、道灌と山吹の逸話を思い寄せ、③山吹をもらった際の相手の顔は忘れられないとした。

〔備考〕「山吹」は日本特産の植物で、『はなひ草』等の諸書に三月の扱い。「山吹もらふ」から想起されるのは、太田道灌のいわゆる山吹伝説であり、これは後に落語「道灌」となって現在に伝えられる。すなわち、道灌が鷹狩の折に雨に遭い、雨具を所望した家の娘から兼明親王作の和歌「七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞ悲しき」（『後拾遺集』）を示されながら、「実のひとつだになき」に掛けて蓑のないことを明かされたことに気づかず、歌道に暗い自分を恥じたというもので、一般には『常山紀談』（元文四年成）に話の原形があるとされる。しかし、この話を湯浅常山の創作と考えることはできず、水原一「大田道灌山吹譚について」（『駒澤国文』32〈平成7・2〉）によれば、これは道灌とも親交のある宗祇の付合に関連して、兼明親王歌とその詞書が道灌歌道説話に組み込まれたものという。つまり、民間に流布するその話を書き留めたのが常山、ということなのであろう。なお、芭蕉には「山吹」を詠んだ名吟もある。

春雨に咄のやうな恋をして　　浮生

名オ1　春三月ないし三春（春雨）　恋（恋）　降物

〔句意〕春雨の降る時節、咄の中にでもありそうな恋をして。

〔付合〕①前句を山吹の贈答主が忘れられないの意と見定め、②ふとしたことから恋が始まる場合を想定し、③春雨の時期に咄のような恋をするとした。

〔備考〕「春雨」は『増山井』等に兼三春、『糸屑』等に三月の扱いで、『三冊子』には「春雨は…三月をいふ。二月末よりも用る也。正月・二月はじめを春の雨と也」とある。厳密に「春雨」と「春の雨」の使い分けがあったとは言いがたいものの、「春雨」を詠んだ和歌に情緒纏綿たるものが多いのは事実で、それが晩春の季節感にふさわしいものであることにも間違いはない。「咄」は説話・伝説・昔話などの類をさし、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）に

は「うちとけた雑談。また、現実にはありそうもない作り話、または、現実性のない口承の物語」とある。「咄のやうな恋をして」とは、作り話の中にしかないような恋を実際にした、ということであろう。同時に、「咄」や「春雨」の語の選択には、前句が道灌の伝説を踏まえることがからむに相違なく、その意味でも前句への密着度が高い付け方と言える。

気相のわろき時は文見る　　百里

名オ2　雑　恋（文）

〔句意〕気分のすぐれない時は手紙を読んで心を慰める。

〔付合〕①前句の恋を咄の中によくある悲恋と解し、②恋心に苦しみがちな女性を想定し、その人が慰めとするものは何かと考えて、③気分のよくない時はもらった手紙を読むとした。

〔備考〕「気相」は「気合」に同じく（『書言字考節用集』等に「気相」の表記が見られる）、気持ちのありようをさす。「文」は恋の詞として『番匠童』等に登載される。

只あそぶ四十の内の楽坊主　　氷花

名オ3　雑　人倫

〔句意〕ただ遊びに興じるばかりの、四十歳以前の気楽な身の上の人である。

〔付合〕①前句を遊女などからの手紙を時に取り出しては読む場面と見換え、②色事にのめり込むというのでもなく、余裕をもって思いのままに暮らす人物を想定し、③四十にもならない内から働く必要もない気ままな暮らしで、ただ遊んで暮らしているとした。

〔備考〕「只あそぶ」は働きもせず遊興にふけること。「四十の内」は四十歳に満たないことで、当時は四十が老いの始まり。「楽坊主」は「楽助」「楽人」に同じく、生活上の苦労がなく気楽に世を渡る人をいう。初老にも達していないのに、楽隠居のような境涯のまま、遊び呆けているわけである。

水享いとて夏冬もなし　　嵐雪

名オ4　雑

〔句意〕夏も冬も関係なく、いつでも「水をくれ」の言葉を吐く。

〔付合〕①前句を遊興三昧の人物と見込み、②その人はいつも飲酒しがちと考え、酔い醒めの水を所望する場面を想像し、③「水をくれ」という言葉に季節は関係ないとした。

〔備考〕「享」には受け取るの意があり、「饗」の代用字としてもてなすの意でも用いられる。「享い」は「くれい」にこの字を宛てたもので、「くれい」は物を与える意である「くる」の命令形「くれ」の語尾が伸びたもの。「夏冬もなし」は季節と関係がなく、年がら年中そのようであるということ。

くたびれて勝手の鼾聞えけり　　神叔

名オ5　雑　居所

〔句意〕台所からはくたびれて眠り込んだ奉公人の鼾が聞こえている。

〔付合〕①前句を人使いが荒い主人の言動と見て、②そのために使用人が疲弊するさまを想像し、③勝手の者のくたびれて鼾をかくのが聞こえるとした。

〔備考〕「勝手」は台所で、そこにいる者もいう。ここは勝手の仕事をする奉公人が想定されていよう。「鼾」は睡眠中に口や鼻から音を発すること。

位牌の前の火影静まる　　東潮

名オ6　雑　無常・釈教

〔句意〕位牌の前で揺れていた、灯明の炎も今は静まっている。

〔付合〕①前句を家の中で行事のあった後と見込み、②人の集まる法事を想定して、仏壇辺の様子がどうかと考え、③位牌の前の灯火も静まるとした。
〔備考〕「位牌」は死者を祀るために法名を記した板で、多くは仏壇に置く。「火影」は灯火の炎やその光をいい、ここは仏前に献じる灯明をさす。

真実に蕎麦切打て送る也　　百里

名オ7　雑　食物
〔句意〕心を込めて蕎麦打ちをして、死者を送ることである。
〔付合〕①前句を読経の僧侶が退席した後のさまと見込み、②これを葬礼の場ととらえ、後に精進料理が振る舞われるものとして、③真心から打った蕎麦切りで、葬送を果たすのであるとした。
〔備考〕「真実に」は誠心誠意の意。「蕎麦切」はただ「蕎麦」というも同じで、そば粉を水でこねて薄く伸ばし、細く切った食品。「打て」はその練り固めてたたく動作をいう。ここでの「送る」は死者の葬送をすることであろう。「蕎麦」は精進料理の一品として寺院との関連が深く、『類船集』には「蕎→聖霊祭」の付合関係も登載される。「蕎麦の花」や「新蕎麦」は秋の詞ながら、ここは葬儀を終えた後の直来をさすと見られるので、雑として問題がない。芭蕉には「蕎麦」への言及やこれを読んだ句が少なからずある。

城の近くに旅ごもりする　　神叔

名オ8　雑　旅体
〔句意〕城に近いあたりに旅人として逗留する。
〔付合〕①前句の蕎麦を宿泊者への振る舞いと見換え、②旅客へ誠意をもって接する旅籠を想定し、そこには長逗留する者もいるだろうと考え、③城の近くで旅の滞在をするとした。
〔備考〕「旅ごもり」は旅人として一定期間の滞在をすること。その地域を「城の近く」とした理由は不明ながら、城下町の活気を想定して、そうした所の宿屋ならば客人への配慮も並ではないはず（当時の蕎麦はご馳走でもあった）、と考えたのかもしれない。

傘の外にまぎるゝ傘はなき　　嵐雪

名オ9　雑　器物
〔句意〕手に差す傘のほかに、他人の物と紛れるような傘はない。
〔付合〕①前句が長逗留の旅人を詠んだことに目を留め、②退屈をかこつ中で心を動かすこととして、物の紛失という事態を想像し、③差し傘のように他とまぎれやすい傘はないとした。
〔備考〕雨・雪や日光をふせぐためにかぶる「笠」に対して、同じ用途の「傘」は柄を付け手に持つようにしたもので、カラカサ・サシガサなどともいう。ただし、「笠」と「傘」は字として通用させることがあり、「傘」の字で両方を含意させることもある。「まぎるゝ」は他と入り混じって区別がつかなくなることで、差し傘を紛失しやすいのは、古今にわたる共通事なのであろう。「傘」に狭義・広義の二意があることを利用して、傘くらい紛れやすくてなくしがちな傘はないとしたわけである。

夜半夜あるき母の気遣ヒ　　氷花

名オ10　雑　夜分・人倫
〔句意〕夜中に遊び歩くので、母の心配は絶えることがない。
〔付合〕①前句を傘が紛失しがちであることの愚痴と見て、②それを言うのは何かと気にしがちな人であると考え、子ゆえに気苦労の絶えない母を想定して、③夜中まで夜歩きする息子ゆえ、母は心配でならないとした。

〔備考〕「夜半」は真夜中のことで、底本で「半」にナカの振り仮名があるので、これもヨナカと読むことになる。「夜あるき」は夜間に外を歩くことで、とくに遊里などでの遊びをさすことが多い。ここもそうした道楽息子が想定されるところで、母親が心配するのをよそに、遊び歩いているのである。「気遣ヒ」は心配したり配慮を施したりすること。

あたゝかに風呂吹煮ユル冬の月　　東潮

名オ11　三冬（風呂吹・冬の月）　月の句　食物・天象・夜分

〔句意〕冬の寒々とした月の下、あたたかそうに風呂吹き大根が煮えている。

〔付合〕①前句を夜も遅くに帰宅した子を母が気遣うものと見換え、②あたたかい料理で冷えた体を癒やしてやろうという配慮を想定し、③家では風呂吹きにした大根があたたかそうに煮え、外では冬の月が冴えわたるとした。

〔備考〕「風呂吹」は輪切りにした大根・蕪などをゆで、味噌だれをつけて食べる料理で、『寄垣大成』に十一月、『通俗志』に兼三冬の扱い。「冬の月」は冴えた大気の中で澄みわたり、美しくも凄惨な感じを与えるもので、兼三冬に扱うことが多い。

先度の雪に師走落つく　　百里

名オ12　冬十二月（雪・師走）　降物

〔句意〕先だっての雪によって、あわただしい師走にも落ち着きが出てきた。

〔付合〕①前句を寒い夜にとる夕餉のさまと見定め、②腹具合も落ち着いてぬくもってくる感じをいかしつつ、歳末ころの景観を描こうと考え、③先ごろ降った雪のせいで、師走のせわしない中にも落ち着きが感じられるとした。

〔備考〕「先度」は先ごろ・先だっての意。「師走」は十二月の異名で、大晦日の収支決算を控え、その字が示す通り、僧侶も走るほどの気ぜわしさを味わうことになる。「落つく」は安定した状態になること。「雪」は多くの書で十一月の扱いながら、ここは「師走」とあるので、歳の瀬に降る雪ということになる。なお、前句の「冬の月」から「師走」が導かれたのであろうことに関して、天理図書館本『河海抄』は『源氏物語』「若菜下」の「冬のよの月は人にたがひてめで給ふ」に「枕草子すさまじき物しはすの月夜とある心也」と注し、このような『枕草子』の本文は未見ながら、「師走」と「月」をつなぐ回路のあったことに問題はなく、「月白き師走は子路が寝覚哉　芭蕉」（『ひとつ松』）や「狐の恐る弓かりにやる　珍碩／月氷る師走の空の銀河　正秀」（『ひさご』「疇道や」歌仙）といった句作の例もある。

来春を今から工む大工寄セ　　神叔

名ウ1　冬十二月（来春…工む）

〔句意〕来春には大工職人に来てもらうことを今から手配する。

〔付合〕①前句から師走でも余裕をもって暮らす人物を看取し、②そうした景気のよさのまま、その人が新春に行ないそうなこととして家の改築などを想定し、③来春の工事のために今から大工の呼び寄せを図っているとした。

〔備考〕「工む」は何かを計画したり、計画的に物事を行なったりすること。「大工」は、本来は令制において土木・建築・造船などに従事した技術官人のことで、やがては木造家屋の建築・修理などをする職人のことになった。「寄セ」は寄せ集めることで、ここは大工仕事をしてもらうために職人を頼むこと。『毛吹草』『増山井』等に「春を待」が十二月として立項され、この句の季もそれに準じて考えることができる。

中山道は加賀で持けり　　嵐雪

名ウ2　雑　名所

〔句意〕中山道の繁栄は大国加賀のおかげで保たれている。
〔付合〕①前句を大規模な建築・工事の準備と見換え、②公儀普請で名高い加賀藩の下屋敷が板橋にあることや、中山道は木材など諸物資を運ぶための道でもあることを想起して、③中山道は加賀藩のおかげで持っているとした。
〔備考〕「中山道」は東山道の中央部を縦貫する街道で、「中仙道」とも書く。五街道の一つに数えられ、江戸日本橋から上野・信濃・美濃の諸国を経由して近江の草津に至り、東海道に合流して京都に至る。「加賀」は北陸道七か国の一つで、現在の石川県南部にあたる。加賀藩は江戸時代を通して前田家が領有し、加賀百万石とも言われるように、数ある諸藩の中でも格別の大国であった。「持けり」は長くその状態などが継続・維持されていることで、ここは繁栄して面目を保っているの意。江戸から加賀へ行く場合は、中山道から北陸道に入ることになり、大名行列などを通して、加賀藩が中山道にもたらしたものは決して小さくなかった。また、大坂城や江戸城の修築をはじめ、加賀藩は多くの公儀普請（幕府が行なう工事）において力を発揮したことでも知られ、ことに前田綱紀（五代藩主）が明暦の大火で焼失した江戸城の天守台を再建したことは著名。そして、そうした修築の際は、信濃国の木材が中山道を介して江戸に運ばれたのでもあった。さらに、加賀藩の下屋敷は中山道第一の宿である板橋にあり、その意味でも、「中山道」と「加賀」は密接な関係にあったことになる。

一升を米の価のとうがらし　　百里

名ウ3　雑
〔句意〕一升あたりの米価にも当たる唐辛子である。
〔付合〕①前句が加賀の役割を褒めていることに目を付け、②加賀産の米が安く出回って庶民の助けとなっていたことを思い起こし、その安価を強調しようと考え、③一升の米価にも値する唐辛子であるとした。
〔備考〕「升」は容積の単位で、「一升」は約一・八リットル。「価」は値段や価値を表す語で、底本の「價」はこの旧字体。江戸時代、物価指数の基準となるのが米価で、米を量る単位も升や合（一合は十分の一升）や斗（一斗は十升）であった。「とうがらし（唐辛子・蕃椒）」はナス科の一年草で、果実が香辛料や食品・薬品として広く用いられ、日本への渡来は十六世紀（一説には十七世紀）ころとされる。秋に赤く色づくことから、実は七月ないし兼三秋に扱われるものの、ここは香辛料ないし薬品として製品化されたものをさすので、一句は雑として問題ない。二句の関係は「加賀」に「米」を付けたものに相違なく、「加賀米」が成語としてあるように、加賀国産の米は安く経済的であっても、品質が劣るとされていた。

さる代もありと語る老　　氷花

名ウ4　雑　述懐・人倫
〔句意〕そうした時代もあったと語る老人である。
〔付合〕①前句を畑での栽培が始まる前の、稀少なものと珍重された唐辛子のことと見定め、②老人の昔語りの中でそうした話題が出る場合を考え、③そんなころもあったのだと老人が語るとした。
〔備考〕「代」は時間的・空間的に限られた区間を表すのが原義で、ここはある時代・年代の意。「老」は老人のことで、『書言字考節用集』にトシヨリの読みがあり、ここもそう読ませるのだと考えられる。

此たびはまいりあはづの墓の花　　専迹

名ウ5　春三月（花）　花の句　無常・植物木
〔句意〕このたび参り合わせた粟津の墓には、花が咲きかかっている。

〔付合〕①前句が昔話をする老人を詠んだことに着目し、②巻き納めに再び芭蕉翁追善の意を込めようと考えつつ、その墓所が義仲の菩提寺でもあることを思い起こし、老人がここを訪れる場面を思い描いて、③今回は花に包まれた粟津の墓を参拝するとした。

〔備考〕「まいりあはづ」は「参り合はす」に「粟津」を掛けたもの。「粟津」は滋賀県大津市南部の地名で、琵琶湖に臨む松原は粟津が原と呼ばれ、「粟津の晴嵐」（近江八景の一）として知られる。また、木曽義仲が戦死した地としても著名で、その墓所に建てられた小庵が義仲寺として今に続く。義仲を慕い琵琶湖を愛した芭蕉は、生前しばしばここに逗留し、遺言により遺骸も同所に葬られている。前句とのつながりでは、義仲の墓を訪ねてかの時代を偲ぶ老人が浮かび上がることながら、そこには、芭蕉の墓前で菩提を弔いたいという、連衆一同の思いが込められてもいたわけである。

無常の鐘のかすむさゞ波　　緑子

挙句　三春（かすむ）　無常・水辺

〔句意〕無常を知らせる鐘の音も志賀のさざ波の中に消えていく。

〔付合〕①前句を義仲寺に詣でた人と見定め、②琵琶湖を臨む地でこの人が耳にしそうなことを想像し、③無常の鐘声がさざ波にかすんでいくとした。

〔備考〕「無常の鐘」は、言うまでもなく、『平家物語』冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」を踏まえるもの（『類船集』に「鐘→祇園精舎」「無常→鐘の音」）で、前句の「墓」からこれが導かれたことに疑いはない。「あはづ」との関連からは、「三井の晩鐘」（近江八景の一）が想起されてもよいであろう。「かすむ」は物の形状や音声などがぼやけてはっきりしない状態のことで、ここは鐘声が波間に消えていくことをいう。なお、立ち込める霞が春季である（『はなひ草』等の諸書に兼三春）ことから、形式的に「かすむ」が季の詞としても働いている。「さゞ波」は細かく小さな波であると同時に、琵琶湖の西南沿岸地方をさし、近江国の古名でもあった。

以上の分析に基づき、最後に、付合のあり方や一巻全体の様相について、考えるところを記しておく。

まず、この歌仙が十日前に没したばかりの芭蕉を追悼する興行であることは、発句の「十月」（死没の時期を明示）や脇の「しぐれ」「香」（墓前の様子を想像）によく示されており、「しぐれ」は芭蕉を表徴する語彙の一つでもあった。同じことは名ウ5の「あはづの墓」（墓所を明示）と挙句の「無常の鐘」「さゞ波」からも看取されるところであり、この連衆が歌仙の最初と最後に義仲寺のさまを髣髴とさせ、これらに追善の意を強く込めようとしていることは間違いがない。このほか、初ウ11の「翁」や続く初ウ12の「山吹」、名オ7の「蕎麦切」なども、芭蕉やその句・発言などを想起させるものと言ってよい。しかし、当然のことながら、一巻全体が追悼一色に染まっているわけではなく、また、『紙文夾』「嬉しさを」歌仙のように、似たような調子が続くような箇所も見られず、進行上は問題の少ない一巻と言える。

では、付合手法に関してはどうか。拙稿「蕉門の付句　―芭蕉・其角・支考と元禄俳諧―」（『日本文学研究ジャーナル』18　令和3・6）で詳述したように、芭蕉流付合手法の骨法とは、「前句はいかなる場や人であるかと考え抜き、これに位を合わせた付句を模索することだった」のであり、この〔見込〕の深く正確な点において、芭蕉は他（蕉門を含む元禄俳人）の追随を許すことがなかった。そして、ともすれば知識に頼って想像力の発揮を怠り、あるいは前句から思いついたことにすがって、ひとりよがりやありふれて精彩を欠く付句をなしがちなのが、元禄期（およびその後）の一般的な傾向であった。この歌仙の場合、付句ごとにその出来加減はまちまちながら、総じ

て言えば、やはり右のような欠点が目につきがちということになろう。

一つの例として、「来春を今から工む大工寄セ　神叔／中山道は加賀で持けり　嵐雪／一升を米の価のとうがらし　百里」（名ウ1～3）を取り上げるならば、「大工寄セ」から普請事業で名を馳せた加賀藩を思い寄せ、「加賀」から廉価として知られる加賀米を想起したことが、各付句の基盤にあるとしか考えられない。そして、その〔句作〕においては、「前句をつきはなしてつく」（『去来抄』「修行」）ということが意識されたためか、たしかに「前句の情を引来る」（同）ことなく、離れた内容の句になることが試みられている。ところが、〔見込〕の段階で「前句は是いかなる場、いかなる人と、其業・其位を能見定め」（同）られてはいないから、二句はただそれぞれの内容を発信するにとどまり、両者が相まってある場面を構築することにはなっていない。ここに、芭蕉流との微妙ながら実は大きな違いがある。

次に、もう一つの例として、「城の近くに旅ごもりする　神叔／傘の外にまぎるゝ傘はなき　嵐雪／夜半夜あるき母の気遣ヒ　氷花」（名オ8～10）を取り上げるに、ここでもそれぞれの問題点が見えてくる。嵐雪句の場合、やはり「前句の情を引来る」ことなく、「前句をつきはなして」いることは認められるものの、ではたしかに付いているのかというと、首をかしげざるをえない。問題は、城の近くの逗留（この前句自体に曖昧さのあったことが、そもそもの問題である）という事態を吟味することなく、〈長逗留→退屈→ちょっとした事件の期待〉という独断めいた連想から、傘の紛失という出来事を思いつき、これに満足したことであろう。しかも、一句自体は、誰にでも覚えのある、一種の警句めかしたものとなっており、狂風柳句の先蹤のようなものになっている。宝永以後の連句にしばしば見られる付句の一典型であり、それが元禄七年時に嵐雪によって詠まれたことに注目しておきたい。一方、氷花句の場合は、前句に愚痴めいた口吻を感じ取り、何かと嘆き言の多い人物として年配の女性を導き出しつつ、その人の最たる心配事として息子の行状を寄せてきたもので、「前句は是…いかなる人」という見定めの上で趣向を立てていることが認められる。芭蕉流の基本はたしかに共有されていることながら、そうした心配性の母を表すのに「気遣ヒ」の語を使ってしまったのは、一つの問題であろう。芭蕉連句の一特徴は、直接的な語を使わないまま、具象的にそれぞれの性質を表現するところにあったからである。

誤解のないよう、急いで付言しておくと、この歌仙は芭蕉提唱の付け方をはずした非芭蕉流の連句作品である、と言いたいわけではない。基本的なところでは、前句を見定めながら趣向を立て、前句を引きずらないような句作に励んでいると認められる。それでも、ところどころに見立の甘さを指摘できるのは、多くの場合、前句自体が吟味に値する内容を備えていないか、付句作者に吟味の用意ができていないか、そのいずれか（時に両方）に原因がある。そうした際の対処は、主として次の二つ。その一は、前句のある語に着目し、これと結び合う語（たとえば「大工寄セ」から導かれる「加賀」）を核に一句を構成すること。その二は、前句からひらめいたある想念（たとえば「逗留の無聊をしばし忘れさせること」）をもとに、付句を構想していくこと。いずれも、〔趣向〕と〔句作〕の距離が短くなりがちで、連想された語や思いついたことがそのまま句に残りがちとなるものの、「前句をつきはなして」は金科玉条のように守られているから、時に、付いているかどうかが不明瞭な付合をも生み出すことになる。それこそが、芭蕉没年当時に広まっていた付け方なのであり、本歌仙にもその傾向が少なからず見られたことになる。さらに多くの作品を取り上げ、この点を確認していくことにしたい。

佐藤　勝明（和洋女子大学　人文学部　日本文学文化学科　教授）

（令和三年十一月十六日受理）